

主体的・対話的で深い学び 問題解決学習入門（藤井千春・第2・3章）

近畿地方 ESD 活動先センター 中澤 敦子

著者は、主体的な学びには探究的に考える学習活動が必要であると述べている。「探究」に至るためには直接体験に根ざした「心が動く」ことが必要であり、「文脈性のある」対話の中で思考が行われ、「思考力」「判断力」「表現力」が養われることにつながるという。また、「主体的・対話的で深い学び」が成立するためには、問題解決学習における単元構想において、子どもたちが「鍛えられて育つ」ように教師側の十分な配慮がなされる必要があるとも述べている。

そこで、著者の示す単元構想の中で以下の3点において考察を加える。第1に個別学習と集団学習の捉え方について、第2に「人の生き方」から学ぶ、第3に子どもに対する評価についてである。

第1に個別学習と集団学習の捉え方について、教師は子どもが一人で学習に取り組むことのできる自立的な学習態度と友だちとかかわり合って学ぶ協同的な学習態度の双方を育成することが必要だとしているが、筆者は、ここであえて個別学習と集団学習とを分けた捉え方をする必要は無いと考える。なぜなら、学級の中で各自が仲間たちの存在を意識して関係性の中で行動しているはずであり、個別学習と言い切れないのではないかと。反対に集団討論している場合においては、一人ひとりが自分の思考の時間を持ちつつ集団の中で意見を述べる訳である。こうしてみると個別学習と集団学習は同時にあるいは並列的に存在すると言えよう。また、著者は、一斉授業での個別に対する支援の限界を挙げ、「特にこの単元で育てたい子ども」を選定すると述べているが、筆者は、子どもは前もってここで育てられると教師が見極めることができるようなものではなく、学習過程において1時間ごとにさえも変わっていくものであると認識している。しかも、教師が特定の子どもの育てたいと思うことで指導に偏りが生じ、公平性に欠けることも懸念されると思われる。

第2の「人の生き方」から学ぶということは確かに大切なことであり、子どもたちにとって有用なことであろう。著者が述べるような「大人としての生き方」が子どもの心を動かすには、人間として信念を持って生きている姿や世の中のためになることを考えて行動している姿を見せることが必要である。まさにそれが子どもたちの憧れの対象となり、授業の中に深い学びを成立させる大事な切り口として使うことができるのではないかと思う。

第3に子どもに対する評価について、子どもには教師による心理的な励ましや支えが必要であると述べているが、それだけではなく友達同士の認め合いも大いに有用であると思われる。前の項で著者は集団の教育力という言葉で表現しているが、それが評価のときにも表われる必要性を感じる。

このように、著者が述べるように子どもたちの学ぶ力を育てるために学習活動を構想する際には、教師は、授業が生きるように子どもたちの思考に働きかけることを常に念頭に置くことが大事である。ここに教師の授業づくりの手腕が表われるのだと思う。